
モンスターハンター 【負に抗う狩人】

散華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター 【負に抗う狩人】

【Nコード】

N4375Z

【作者名】

散華

【あらすじ】

正体不明の龍の襲撃によって多くの大切な人を失った人：ヨハン・シュトラール。彼はこの世のモンスターに復讐するためにハンターとなる。

しかし、ある少女との出会いをきっかけに別の志も同時に抱くようになる。二つの志を抱きながら周囲の人々と過ごす中で成長していく少年と少女の物語

プロローグ（前書き）

初めまして、散華と申します。発投稿なので温かい目で見ていただけたら幸いです。作者は厨二病な上、国語力に自信がありません（殴。誤字脱字のオンパレードになるかもしれません）汗。

こんなダメ作者ですがよろしくお願いします。では、本編をどうぞ

プロローグ

side

僕の目の前に広がっているのは荒々しく燃え続けている炎と、散らばった積み荷、無惨に殺された人々の亡骸だけ…。

「父さん…母さん……」

その中には産まれてからこの15年間、共に生きてきた両親の亡骸があつた。父親は、G級と呼ばれる凄腕のハンターで昔から様々な飛竜を討伐した時の話をしてくれた。幼いころからハンターになることを夢見ていた僕を鍛えてくれたのも父さんだつた。そんな父さんは今、僕の目の前で銀火竜の防具を砕かれ頭から血を流して倒れている…。母親はやり手の行商人でハンターズギルドからも一目置かれていた。この仕事が終わったらドンドルマでハンター用の専門店を作り、その店の店主になるんだと僕は母さんから聞いていた。こんな母さんも炎に巻き込まれて還らぬ人になつてしまった…。

このキャラバンに最早生き残っている人などいない…僕一人を除いて。何故僕は生き残ってしまったのか？その疑問に答えてくれるものは無い。聞こえてくるのはパチツパチツと残骸が燃える音だけ…。

「知りたいのか？」

突然聞こえてきた声に、僕は動揺を隠せずにした。

威圧感があり聞いた者を恐怖させるような声だつた。しかし、その時の僕はそんな事を気にする余裕は無かつた。生きている人がまだいるんだ！と、いう淡い希望を抱いた。

「誰か…まだ生きているの…？」

僕は今にも消えそうな弱い声を出して、辺りを見回した。しかし、生きている人なんて僕の視界には一人たりとも入らなかつた。代わ

りに見つけたのは、今まで見たことも聞いたことも無いような姿をした、一頭の龍だった。

『貴様が何故生きているのか、教えてやろうか？』

間違いない。この龍が言葉を発している。常識的に考えて龍が喋る訳がない。何故、この龍が喋っているのか疑問には思った。だが、そんなことよりも皆の敵が目の前に居るのだ。今なら敵討ちだって出来るはずだ！

そう考えた僕は、咄嗟に近くに落ちていた父さんの愛刀『飛竜刀』銀』』を手に取り、目の前の憎き龍に全力で振り下ろした。

「うらあああつつっ！」

今の思いを全て乗せ振り下ろした太刀は、的確に龍の胴体を捉えていた。これなら確実に痛手を負わすことが出来る！
しかし、現実はその甘くは無かった。

『まだまだ足りんな…』

驚くことに、その龍は避けることもせずそのまま胴体で僕の太刀を受けとめた。太刀は切れることも弾かれることもなく、龍の胴体の表面で止まっている。僕がそれからどんなに力を入れてもってピクリとも太刀は動かない。

『やはりこの程度か…』

龍は、そう呟くと脚で太刀ごと僕を吹き飛ばした。まるで足元にある小石を蹴るかのよう。そんな攻撃で僕は数メートル先まで飛ばされていった。

「ガハッ…」

僕は受け身を取ることも出来ずに後方にあつた岩に背中を強く打った。肺から根こそぎ空気を奪われ、正常に呼吸が出来なくなったらしい。ただ幸いなことに骨が折れたり、内臓にダメージを受けたりはしていないようだった。

『ふん…そのままおとなしく聞いていればよい』

「何の話だっ！」

『我が貴様を生かしてやった理由だよ』

生かしてやった…ってことは、僕が生きているのは偶然でも何でもないのか…。

『その通りだ。良く分かっているようだな』

この龍は人の心まで読むのか…。こんな奴相手じゃ、倒せる訳がないな…

『我が望みはただ一つ。我の完全復活のみよ！』

「完全…復活だと…？」

『そうだ。さらなる高みを目指すためには必要不可欠なことだ。完全復活をするにはまだまだ足りないものがある』

さらなる高みだって？この龍は何をするつもりなんだよ？

『それを話つもりは無い。貴様には関係の無いことだからな』

「周りくどい話は止める。問題はなんで僕を生かしたのかだろ！」

『少しゲームをしようと思っただけ』

「ゲームだと？」

『ああ。我の完全復活に足りないものは、悲しみや憎しみなどの負の感情だ。これを集めるのに人間を使わない手はない。大量に早く集まるからなあ』

「何て奴だ！」

『何とでも言う方がいいさ。負の感情を素早く集めるためには、こうやって隊商や村、町を襲撃するのが一番だ。襲撃するための配下を今集めているところだ。そこでちょっととしたゲームを考えたのだよ』

「何をやらせるつもりだ？」

『少し人間達にもチャンスを与えてやろうというものだ。我の配下を一齐に送るのではなく一頭ずつ順番に送ってやる。それを凌げば負の感情の増加を防げるだろう。そしてそれは我の復活を妨げることにもなる。どうだ？面白そうなゲームだろ？』

つまり、襲ってくるモンスターを退けていけば良いって訳か。ギルドに相談して対策すれば阻止できるはずだ。

『ああ、ギルドは信用しないほうが良いと思うぞ。』

「何っ?」『ここはついこの間ギルドナイトによって調査された場所。その時、この地域全体が侵入禁止区域に設定されたはずだ…。それなのに何故民間人の貴様等が入れたんだと思う?』

「それは…父さんを信賴して…」
何でだ?これ以外理由があるわけないのに…。もつと悪い理由がチラつく…。

『違うな。貴様等は皆実験台にされたのだ。私の危険性を測るための。』

「嘘だっ!」

『嘘だと思っのならこの炎が鎮まるまで待つてみるがいい。ギルドナイト共が来るはずだからな』

「……………」

嘘のはずなのに、どうしてだろう。本当のことだと思えてしまう。ギルドナイトがそんな事するわけないのに…。

『これが現実というものさ。ギルドが必ずしも正義ということはない。決してな』 僕は何を信じればいいのか?信じていたギルドが信用出来ず、頼れる知り合いは皆死んでしまった…。もう信じられるものなんて…

『自分を信じればいい。ゲームは互角でなければ面白くない。貴様に力をくれてやる。』

そう言々と龍は僕に近づいて、先ほど怪我した背中にはがれた龍の鱗を押しあてた。

「ぐわあああつ…」

気が遠くなるような痛みを伴いながら龍の鱗は僕の体に吸収され跡形もなくなった。感じるのは自分の奥底に芽生えた禍々しい力。

『それは我と同じ力。貴様がモンスターを恨めば恨むほど力を与えてくれよう。その力をもつて我を脅かす程の力を得て見せよ。ヨハン・シュトラールよ』 「お前の望み通りになるのは癪だがやってやるうじゃねーか。俺がすぐに教えてやるよ…。力を与えたのは間違いだったってなあ!」

『楽しみにさせてもらおう。さらばだ。』

そう言っただイツは飛び去っていった。その後、アイツの言った通りギルドナイトが現れた。まあ、追いついてやったよ。あんな奴ら信用ならないからな。俺は皆の墓標を作っただけ誓った。

「必ず敵を取る！全てのモンスターに逆襲する……」

これが後に『竜殺し』の二つ名を得たヨハン・シュトラールの生まれた瞬間だった。

プロローグ（後書き）

こんな感じでグダグダ進みます。

基本的にMHP3rdを土台にして書いていきます。
今後も勝手な設定がちらほらでるかと思えます。

こんな作品ですがよろしく願います。

では、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4375z/>

モンスターハンター 【負に抗う狩人】

2011年12月15日01時48分発行